

# 2006年度秋学期教育方法学 最終レポート

チーム番号：A3

0521 - 1265

教育学部教育学科      2回生      藤田 美穂

## レポートのレベル申告（Aレベル+特別加点）

**このレポートが（Aレベル+特別加点）であると判断した理由：**

自分の提出したショートレポートとチームレポートを考察し直して、レポート執筆の基準(設定や参考文献の表示等)を忠実に守りながら構成した。また、大事な部分には下線、罫線を引いてわかりやすく明記した。さらに、アブストラクトを作成し、次のページに掲載している。

## 公開同意書

後輩への公開について (a)

web上の公開について (a)

## アブストラクト

私は、佛教大学の教職科目「教育方法学」の授業で、チーム学習を通して多様な学習者の主体的な学習を構想した。

- ・ 全体を通して述べる主張・結論

多様な学習者が主体的に学習できるためには、学習者の背景に存在する教育課題を分析する必要がある。私たちの小学校は学校・地域・家庭の三位のつながりを大切にして、人間関係の豊かさを図ることで、児童自身が安心して、主体的に自覚をもった学習ができるように構想した。また、児童が実感を伴って、学習することや学校へ行くことへの意義を見出せるようにする。

本報告では、以上のことを3章構成で説明している。

- ・ 第1章では、太陽小学校の特色である「ボランティア学習と目にみえてわかる」学習の2本柱で「大家族」のような温かい人間味あふれる小学校を構想し、人間関係の豊かさをはかる。
- ・ 第2章では、感情表現が多様になった学習者に応じた主体的な学習指導方法として「定食」のような「朝の3分間スピーチ」の取り組みを構想する。
- ・ 第3章では、学習者が主体的に学習することができるかどうか検討する。また、学習者は客観的な評価とポートフォリオによる自己評価によって学習達成度を確認する。
- ・ キーワード：メタファー、ポートフォリオ、自己評価、人間関係の希薄化、コミュニケーション

## 目次

- 1 章：チームで構想した学校  
( 4 ~ 7 ページ)
- 2 章：多様な学習者が主体的に学習し、一人ひとりの学力を高める  
ための具体的な学習指導方法  
( 7 ~ 1 2 ページ)
- 3 章：学習指導方法の評価と学習者の査定  
( 1 2 ~ 1 5 ページ)
- 4 章：この講義の感想や希望  
難解だった一般用語・専門用語  
時期受講生へのアドバイス  
( 1 5 ~ 1 6 ページ)
- 参考・引用文献  
( 1 6 ~ 1 7 ページ)

## 第1章：チームで構想した学校

### 1、はじめに

今日、学校教育に関して様々な問題が浮上し、議論されている。以前から言われ続けているゆとり教育、総合的な学習の成果や学力の低下、いじめ、学校教育法の改正、英語教育の導入など、いつの時代も学校教育課題はあとを絶たないものである。

そこで、私たちのチームでは、2020年の学校教育を見据えた上で、1つの問題に焦点を絞り、その問題解決打破のための魅力のある学校を構想する。

### 2、太陽小学校のコンセプト

私たちのチームは、小学校の名前を「太陽小学校」と名づけ、太陽のような、温かさと優しさをもった小学校を目指す。

私たちは、現在の教育にみられる人間関係の希薄化や児童グループの少人数化といった問題が、2020年には以下のような問題に発展していると考えた。

- ・少子化、核家族化がより一層の人間関係の希薄化をもたらす。
- ・決まりきった人との決まりきった人間関係によって、他者とうまくコミュニケーションをとる能力や社会性などが養えなくなる。それによって、狭範囲の視野しかもてなくなり、閉鎖的な人間に陥る。学校に行く意味を見出したり、自分の居場所を見つけたりすることが困難になる。さらにはそれらが、学習意欲や学力の低下へと繋がる。
- ・人間関係の薄さやはかなさが、安易で残酷ないじめの増加をもたらす。

それゆえに私たちは、喩えるなら大家族のような暖かく、様々な人間関係に包まれた学校を構想する。

学校のメタファー：「学校は大家族」のようなものである。

社会にそれぞれの役割をもって存在する学校・地域・家庭が、人間関係を通してつながりを持ち、お互いに協力しあって生きていけるひとつの大家族のようなものをつくりたい。生徒である「私」のまわりには、父・母のような教師、また、弟・妹のような低学年児童、兄・姉のような高学年児童、おじいちゃん・おばあちゃんのような地域のお年寄り、親戚のような地域の人々がいる。「私」の周りにいる、たくさんの人々と家族のような交流を通して人間関係の豊かさがはかれるようなものであってほしい。

また、「私」とそれを取り囲む人々との関係だけでなく、例えば教師と地域のお年寄りと

の関係や、保護者と町の人々との関係など、学校という大家族をもとに社会の全ての人々が人間味あふれたかかわりあいをもって、暮らしていけるようなものを構想する。

### 3、太陽小学校の特色

太陽小学校は、上に述べたような問題を解決するための、2つの特色から成り立つ。

一つめは、「ボランティア学習」である。

ボランティア学習では、総合的な学習の時間や土日の休日を利用して、学校の枠を超えた様々なボランティアに取り組み、またその成果をみんなに発表する。

この学習におけるねらいは、他者とのコミュニケーション能力の低下を補うことにもあるが、学校では出会えない多くの人・ものとの出会いを通して、広い視野をもち、豊かな人間性や人間関係を養うことある。

この学習の具体的な取り組みと期待できる効果として、次のようなものを例にあげる。

- ・家族でボランティアに参加する。

家族で活動・共有する時間が増え、会話のきっかけができる。それによって、家族とのコミュニケーションの機会が増える。

- ・地域の人・年配の人・大人との交流

様々な人々（知的障害者や老人など）との共同体験をとおして、固定観念をうえつけずにより広い社会性を身につけられる。また、多くの人への理解へ繋がられる。

大人（親）同士のつながりをもたせることで、学校に対する意識の交換、価値観の共有、協力による積極的な学校理解への参加を促す。

- ・地域・学校・家庭のつながりを築き、三位一体の連携基盤をつくる

児童の登下校や遊びにおいての地域への親しみ・安全性の向上。

子ども同士だけではなく、幅広い人による、幅広い人たちとのコミュニケーション機会の増加とその能力の発達。

- ・異年齢とのかかわり

頼れる存在・憧れの存在や、自身の責任感が芽生え、人間関係に厚みが増すことでいじめの消失や発覚を助長する。

- ・成果の発表活動

活動の意味を自覚して、向上心を持って次の活動へつながられる。新たな興味・関心の対象を獲得できる。

二つ目は「目に見えてわかる学習」である。

目に見えてわかる学習では、本来目に見えにくい教育というものを、具体化させ、身近に感じさせることによって、子ども・教師・保護者に認識させる。

この学習におけるねらいは、ボランティア学習で豊かになった人間性を土台として、子どもの自発的な学習意欲の芽生えを見逃さずに利用し、学習能力を引き伸ばすことにある。また、様々な人からの目が入ることで、子ども同士、教師同士、保護者同士が学習に対して意識し合い、高め合うことにある。

この学習の具体的な取り組みと期待できる効果として、次のようなものを例にあげる。

- ・簡単な問題プリントを1から100まで棚に入れて廊下に設置する。

子どもがやりたい速度やレベルに応じて学習を選択できる。

できたことが目にみえてわかることで、達成感を味わうことや、学びたいという意欲や向上心の自然な発達を期待することができる。

- ・ゲームや遊び感覚の学習方法を取り入れる。

もっとやりたいという好奇心やみんなもやるから自分もやるといったような競争心による学習意欲の相乗効果が期待できる。これを学力向上に生かす。

- ・クラス間の壁をなくし、時と場合に応じて自由に開け閉め可能にする。

隣のクラスが見えることで、クラスの状況・状態を学校として把握できる。教師同士のスキルアップや児童同士の刺激のし合いができる。

- ・自由に学校参観ができる日を設ける。

学校の実態を保護者や地域の人が自分の目でみて実感できる。様々立場から見た意見や提案を取り入れることができる。いじめや学校の課題も発覚しやすい。

#### 4、構想した小学校の考察

このような特色の二本柱に支えられて、太陽小学校では人間関係の希薄化といった教育課題の解決を図りたい。

しかし、深く考慮してみると、実際にはこの太陽小学校の取り組みに対して納得のいかない点もいくつかある。

例えば、教師は親と違って教師にしかできない役割をするべきだという意見である。この場合、教師は親のような愛情を持ち、威厳をもった存在であるという喩えであり、必ず

しも教師が親の役割にそって従えというわけではない。というよりも、むしろ教師はたくさんの子どもの親になりきることなどできないので、教師は教師の役割を、保護者は親としての役割を十分に自覚してつとめてほしい。私は、親のもつ良さを教師が理解し、教師のもつ良さも親が理解して、お互いの善さを認め合い、受け入れた関係性であればという願いをメタファーに込めたいと思う。

また、いじめに対する対策は、豊かな人間関係のみで、解決できるものではない。最近よくあるような、不特定の人物からによる、情報機器を使ったいじめや、陰湿化したいじめに対する解決策は、もっと具体的な方法が必要になってくると思った。しかし、いじめがどんな様態であっても、被害者の口や周りの人々の目を通して発覚しやすい状況を社会全体でつくっていく努力は必要である。そして、子どもたちの不満やストレスをいじめへと転換させないで、その他の興味・関心のあるものへと向けさせて、いじめそのものをつくらないことも大切だろう。

このように、私たちのチームが構想した学校では、子どもたち自身の自発的な意識によって取り組みが行われ、自分自身でその成果を獲得していくことを大切にしたいのである。子どもたちに、社会の成り行きによって無理強いされ、息が詰まるように苦しみながら成長していったほしくない。私たちは、子どもたちが自由にのびのびと成長できる場でもあり、また学びの場でもある学校、子どもたちをしっかりと受け入れ受け止めてやれる学校を提供できる教師でありたいと考える。

## 第2章：多様な学習者が主体的に学習し、一人ひとりの学力を高めるための具体的な学習指導方法

### 1、「多様な学習者」の定義

私たちのチームでは、『学習者の感情表現』が多様になったと考える。

学習者は、自分の感情を人に伝達する際、様々な表現方法を用いる。例えば、日常会話や発言など自分の口で「話すこと」によって表現することができる。また、毎日の日記や作文など「書くこと」によって自分の気持ちを表現することもできる。

しかし中には、そのような感情表現の方法を知っていても、自分の複雑な感情をうまく伝えられない者がでてきた。例えば、すぐに怒ったり、無口になって黙りこんでしまったり、あるいは物に当り散らしたりするなどの行為である。これらの行為も、自分の気持ちを他者へ伝えるといった点では表現力は乏しいが、一種の感情表現とっていいだろう。

このように、学習者の感情表現はさまざまである。

では、なぜ多様な感情表現をする学習者が現れるようになったのか。

その背景には、「**学習者の家庭事情**」、「**親の価値観**」、「**少子化や核家族化**」があり、深く関係していると考えられる。今や、社会において文化的階層が明確にわかる程、「**学習者の家庭事情**」は様々である。そのため、金銭や愛情など複雑な問題を抱える家庭環境では学習者の心にゆとりのない状態をもたらすのではないだろうか。また、「**親の価値観**」によって、学習者は行動も心もコントロールされ、自分自身の感情をもつことができない者が増えている。命令や指導されることに依存し、主体性を忘れた、むしろ奪われた学習者が存在していると思う。さらには、「**少子化や核家族化**」によって様々な人との豊富なコミュニケーションが不足している実態がある。それによって、人に感情を表現する機会や経験は確実に減少しているといえ、また経験から得られる語彙や知識のなさが感情表現を乏しくしているものとして考える。

## 2、「多様な学習者が主体的な学び」のメタファー

私達のチームでは、「多様な学習者が主体的に学ぶ」とは『定食』のようなものであると考える。定食は、ご飯とお味噌汁、お漬物といった**定番のメニュー（主食）**に、**自分の好みや気分に応じて好きなおかずを選び合わせて食べる事が出来る**。また、**主食とおかずを合わせて食べる事で十分な栄養が取れるように、定食全体での栄養バランスがしっかりと考えられてある**。

ゆえに定食をメタファーに設定した理由は、以下の三点からである。

1 つ目は、定食には、**ご飯と汁物といった主食のようなどっしりとした基礎学力を、学習者全員が必ず平等に得られるという条件があるという点**である。

2 つ目は、**おかずを自分で選べるというところから、学習者自身が主体的な学びの選択ができるという点**である。ご飯を食べて栄養をとる、つまり学習者が学習して学び取るという目的の下で、**メニュー（プロセス）は自由であるということ**である。

3 つ目は、**栄養バランスが考慮されているところが、学習者自身がどのような手段でアプローチしようと、最終的に全員に対して一定以上の栄養（学力）が得られることが保障されているということに当たり、安心して主体的に学ぶことができるという点**である。

## 3、日本の子どもの読解力の実態と読解力の定義



読解力とは、横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 FY プロジェクト / 編の著書『「読解力」とは何か PISA 調査における「読解力」を核としたカリキュラムマネジメント』2006年 三省堂出版( 1 )において、PISA 型読解力として、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」( 2 )と定義されている。

また、平成 15 年 7 月に実施された OECD( 経済協力開発機構 )「生徒の学習到達度調査」PISA 2003 年の調査によると、日本の平均得点の順位が、参加国中 14 位であった。2000 年調査で参加国中 8 位であったものと比べると、順位を 6 つも落としていることがわかる。そのことから、日本の子どもの読解力は低下しているといえる。( 3 )

#### 4、本校の学習指導方法

私たちは、太陽小学校・第 6 学年児童の国語科教育における読解力の向上のため『朝の 3 分間スピーチ』の取り組みを提案する。

また、多様な感情表現をもつ多様な学習者に応じて、言語表現能力の向上も目指した取り組みである。

##### 学ぶ意味 ( Meaning )

スピーチする者は、自分の興味関心のあることについて、知りたい・学びたいといった主体的な気持ちを心の中に留めてしまわずに、行動に移して活かす。そして、知れば知るほど湧いてくる自分の感動や驚きなどの充実した感情を、みんなに知ってもらうことで、学ぶことの楽しさ・達成感・共感できる喜びを体験的に味わえる。また、調べたことを読解し、みんなに伝わるようにまとめる力、感情を表現する力を訓練する。さらに、周りから評価をもらうことで、各々の次の課題を見つけられる。

スピーチを聞く者は、発表者の伝えたかったことが捉えられるように熱心に聞くことで、言語理解能力・読解力を高める訓練をする。また、文章で感情を表現したり、わかちあったり、評価することで互いに高めあうことができる。

##### 学習活動 ( Action )

児童は毎朝順番に、クラス全体の前で 3 分間のスピーチを行う。テーマは「みんなとわかちあおう」といったものである。発表する児童 ( 発表者 ) は事前に自分の興味のある事

柄を調べ、その内容を資料などから読解し、わかりやすくまとめる。その際児童には、スピーチをするために必要な情報を自らの力で模索し、選び出す作業が必要となる。そして、クラスのみんに伝えるように、その内容と自分の感じた事、考えた事をスピーチする。例えば、最近読んだ本のことも、関心のあるニュースでも、季節のことも内容はみんなに紹介したいことであれば何でもよい。学習者自身が、主体的に内容を選択できるようにすることで、活動の幅は広がり、意欲的な取り組みにすることができると考える。

発表を聞く児童（聞き手）は、事前に配布されたワークシートに、どのような内容のスピーチであったのかをわかりやすくまとめて、教師に提出する。またそれとは別に、スピーチのどのような部分がわかりやすかったか・わかりにくかったか、共感できたところ、感想などをコメントシートに書いて発表者に渡す。

発表者は発表した原稿ともらったコメントシートを、聞き手は提出済みのワークシートを、毎回ファイルに綴じていき、それをクラスの仲間が調べた情報が詰まった「お宝ファイル」にしていく。学習者は、活動の成果を目にすることで、達成感や充実感をえて安心した取り組みを継続させることができる。また、客観的な評価に支えられて基礎的な学力から発展した学力の獲得へつなげることができると考える。

この活動に児童が習熟してきたならば、スピーチの時間を5分・10分と延ばしたり、また原稿を見ないでスピーチをさせたり活動の幅を広げていくことができる。

### 学習内容（Contents）

この学習は、みんなの前で発表するためにとても勇気がいるものであるが、子どもに確かな読解力や表現力がつくことによって、子ども自身が自信をもって取り組めるような活動にさせたい。

まずは取り組みを始める前に、教師が日常的な模範を示す必要がある。児童は毎日教師が行っている朝のお話や帰りのお話、模範スピーチなどから、スピーチによって自分の伝えたいことをみんなに伝える際のコツを学び取らせる。具体的に、どのような内容をスピーチしたらいいのか、どのような表現・態度・表情・言い回しなどで発表したらいいのかを児童自身の目や耳で感じる事が大切である。また、自分の考えを人に伝えるためには、自分自身が伝えたいことについて、深く理解しておくことが必要だというポイントを抑えさせなければならない。

また、児童には話の核心に注意して聞くように指導し、スピーチを聞いて、その内容や

感想を具体的に詳しく書かせる。そしてそれに対して教師はコメントを返してやり、初めに児童たちの書く姿勢や聞く姿勢をつくって定着させる必要がある。

それから、前準備をせずいきなり活動に取り組みさせることは困難であると考えられる。ゆえに、準備段階として一ヶ月ほど朝の時間と国語科の時間を利用して、児童が活動の概要を詳しく知り、活動内容を理解するための時間を設ける。朝の時間は具体的な活動の模索をし、国語科の時間は読解や発表に対する基礎的な力がつくように要点を強化して授業を進めていく。また、小集団（生活班など）でスピーチすることから始めて、最終的にクラス全体の前でも発表できるよう、児童を除々に活動へ慣れさせていく必要がある。スピーチ内容も、児童の生活日記やボランティア学習のことについてなど、資料から読解させて行う前に比較的取り組みやすい段階をはさんでやるのがよいだろう。従って、ある程度活動に慣れた後、実際に朝の活動としてクラスでの取り組みを開始する。

このように、児童自身が主体的に学びやすい環境を用意し、活動を支える基礎の部分をしっかり押さえられるように考慮することで、児童の学習する方向を位置づけた安心感のある活動にすることができ、またそれによって、学習者はより主体的に学ぶ意欲を増進させると考える。

また、この活動による効果がより一層得られるように、年間を通して発表する頻度を増やしたい。けれども、児童の日常的な負担になり過ぎないように毎朝行うのではなく、月曜日はクラスみんなの前でスピーチ、水曜と金曜は班内でスピーチをするように設定することで、週1回は各々が発表する機会をもつことができるようにしたい。また、定期的に班員の入れ替えを行い、できる限り多くのクラスメイトの様々な考えに触れられるようにする。

この活動により、自分の興味のあることについて発表できるようになったならば、次に読解力のより一層の向上を目指して、スピーチのテーマを統一していく。例えば、今月は「新聞を読んで関心のある記事について自分の考えを述べよう」とか、夏休み明けには「お気に入りの本を紹介しよう」など、調べて読解する力に重点を置いた活動がより効果をもたらすと考える。

その他には、事前に、調べるためにインターネットや図書館を利用するなどの情報獲得手段について知り、技術を習得する必要があると考える。

## 学習環境 (Environment)

教室(コの字型の机配置であると話しやすく、聞きやすい)、調べるための環境(図書室・パソコン室・インターネット・新聞など)、様々な人々とのコミュニケーション(家庭・地域)等

### 学習用具 (Tool)

スピーチ内容を書く用紙(ワークシート)、コメントシート、ファイル、スピーチ用原稿用紙、筆記用具等

### 学習成果 (Outcome)

- ・ スピーチを聞く姿勢がそのものがみんなの手にコメントとして渡る。記録として残る。  
個人の取り組みに責任をもつ。クラス共同の取り組みで、読解力を高め合う。
- ・ 調べたこと、聞いたことで得た知識。  
新たな興味・関心の発見や、人・モノとの出会いになる。
- ・ 調べたこと・聞いたことをわかりやすくまとめる。  
読解力を高める訓練となる。自分の考え・人の考えと向き合って、話の核となる部分をしっかりと捉える力をつける。
- ・ 主体的な考えや感情を自ら表現することの充実感・満足感・達成感の獲得  
感情の表現を豊かにする。次の課題に活かせる。様々な人とコミュニケーションをとることの大切さに気づく。
- ・ クラスのお宝ファイル。  
積み重なった取り組みを形として残せる。クラスのみんが一生懸命に取り組んだ努力の結晶。

## 第3章：学習指導法の評価と学習者の査定

### 1、どのような状態になったとき、この学習指導法は成功したと判断できるか

まず、発表者のスピーチ内容に、児童自身の感情や考えが、言葉と文章によって豊かに表現できていること、それを聞き手が理解し、要点を抜き出していること、また調べた資料を読解する力、自分の考えをまとめて発表する力の成長が感じられることが前提となる。さらに、児童が主体的に活動に取り組み、子ども自身が充実感や、満足感、達成感を感じていること、クラスのみんたと協力し、刺激し合いながら活動に取り組んで

いることも重要である。その他に、発表者・聞き手共に、獲得した知識・能力をもとに普段の生活にも応用できているか、もらったコメントから自分の課題を見つけ克服し、最終的に班員やクラスメイトからもらうコメントがプラスのものになったと感じられること、これらを満たした時に、この学習方法は成功したと言える。

## 2、この学習指導方法の実践において予測できる失敗例

話し手の態度として、コメントにいつも同じ指摘が書かれていて、児童自身が自分の課題を見つけ克服しようとしていない、活動に意欲的に取り組んでいないと感じられる場合は学習者に主体的な学びが感じられず、成功とはいえない。聞き手の態度としては、まとめた要点を見る際に発表者の言いたいことを捉えられずに話し手と聞き手にズレが生じている、と教師が感じた場合には問題である。しかしこの場合、活動初期段階は仕方がないものがある。加えて、話し手及び聞き手のどちらにも原因を追求することができるので、活動の経過を踏んで改善されれば成功といえる。また聞き手が発表者に対して指摘や共感のコメントではなく、「おもしろかった・良かった」等の安直な感想だけを並べるコメントが多く見られる場合、教師が事前に行った活動の前準備段階において、指導方法に原因があったと考えられる。さらに、活動の時間のみしか、表現することや考えることをしないようでは意味がない。日常的に探究心をもって、活動を発展させ、クラスメイトや様々な人々とのコミュニケーションにも活かしてほしい。

このように、児童たちの主体的、積極的な活動が見られないときにこの学習指導方法は失敗したといえる。

## 3、何をどのような方法で調べることによって以上のような判断ができるか

子ども自身が主体的に活動に取り組む意欲・姿勢、調べた資料を読解する力・自分の考えをまとめて表現する力がついたか、発表で聞いたことを理解し、自分の考えや感情をもって表現する力がついたかを、ワークシートやコメントシート、児童が提出した原稿から客観的に教師が判断する。そのことに加えて、読書感想文の作成や要点をまとめる小テストを定期的に行ったり、国語の授業での態度、毎日の日記の内容、日常のコミュニケーションなどを見たりして、スピーチ以外の方法で児童の読解する力や表現する力がついたかどうかを判断していく。さらに、児童からもらうコメントや外部からの評価を合わせて、評価の多様性を求める。スピーチを学校開放日に保護者や学生ボランティア、他の

先生方などに見てもらって評価をうける。

また、「お宝ファイル」といったポートフォリオから比較して、具体的な証拠として 児童それぞれが自分の課題みつけ、克服できているかを判断していくことができる。ポートフォリオは保護者面談で用いて、保護者からの活動に対する理解と協力、さらに評価を得ることに有効である。この他に、定期的なアンケートを行い 児童の主観的な活動の取り組みに臨む姿勢や理解度などを判断材料にしていく。( 4 )

#### 4、学習者はどのような方法によって自分の進歩を確かめることができるか

##### ・私たちは今までどのような方法で自分の成長を確かめてきたか

私たちの場合は、主にテストの成績や通信簿などの絶対的な評価や、ほめられたり、評価されたりするといった、他人からの目に見えてわかる評価によって自分の成長を確かめてきた。また、できた・やったという充実感や満足感、達成感を感じたときや、実際に学んだことを日常生活に応用させて活かせたときに、自分自身の進歩を実感してきている。

##### ・太陽小学校で構想する学習指導を受ける学習者は、どのような方法で自分の学習達成度を確認できるか

本学習活動における学習者が自分の進歩を確かめる方法として、大きく三つ挙げられる。

一つ目は、「ポートフォリオ」である。ポートフォリオとは、子どもの作品 (work) と自己評価の記録、教師による指導と評価の記録などを、系統的に蓄積していくもの( 5 ) である。また、ポートフォリオ評価法とは、ポートフォリオづくりを通して、子どもの学習に対する自己評価を促すとともに、教師も子どもの学習と自らの教育をより幅広く深く評価するアプローチ( 5 ) であると著書『新しい時代の教育課程』( 2005 ) において述べられている。クラスメイトからもらうコメントによって自分の出来ていることと足りていないことがわかり、そのコメントシートをポートフォリオしていくことで、以前の評価内容との比較ができ、自分の発表の成熟度を見ることが出来る。また、ワークシートやスピーチ原稿も同時にポートフォリオしていくことで、自らの読解する力や表現する力の達成点と課題を確認することができる。

二つ目は、定期的に行われる要点をまとめるプリントや読書感想文の課題などの評価によって自分の到達度を確認できる。児童には判断できないような指導や評価をするのが教師である。教師の客観的な評価によって、児童は自信をもって成長を確信することができ

る。

三つ目は、「課題提起型活動」である。最初に自分の課題を見つけさせ、それをファイルに残しておき、最終的にその課題を克服できたか児童自身が自己判断する際に、自分の課題までの到達度を自分の視点から確認できる。

以上この三つの観点から、児童は自分の進歩を確認する事が出来る。また、取り組みの成果がでてきたら児童が意識しなくとも、日常生活で何気なく、あるいは抵抗を感じることなく自然と文章を読解できたり、人の話に耳を傾けて聞くことができたり、感情表現豊かに人とのコミュニケーションを楽しむことができるのではないかと考える。

#### 第4章：この講義の感想や希望

今回、教育方法学の授業でチーム学習を取り組むにあたって、初めのうちはとても不安を感じていた。私のチーム学習の経験からすると、今までの学習のメンバーはいつも気心知れた友達であったため、どこかできる人に頼る思いがあったり、どんなに些細な考えでも思いつきで発言したりできる環境にあったからだ。つまり、自身の我が先行することが許される活動であったと言ってもいい。

ところが、今回のような初めて名前を知った人や初めて言葉を交わす人との活動では、いつも以上にお互いを思いやり尊重することや、協力することが必要となってくる。そのため、個性と我をコントロールすることはそう簡単なものではないが、チーム学習に対する良い意味での緊張感を持ち、自分の立場を意識することができた。また、明確な役割分担のもと、チームの一員として個々が責任を持った活動をすること、自分自身の特性を見出し、見つめなおすことに繋げるなど、このようなチーム学習の取り組みで得られる可能性に対して、大きな新鮮味や魅力などを感じていた。

実際は、回を重ねるごとにチームの仲が深まり、学習活動が親しみやすくなった。また、個々の能力を認め合って、評価しあいながら上手く進めていくことができよかった。しかし、仲がほぐれて緊張感がほぐれすぎてしまった分、役割分担と自己責任が曖昧になってしまったようにも感じる。実習や、病気は仕方がないが、忙しい中でもチームで集まって構想するメンバーには偏りが見られ、負担が大きかったように思う。協力することは、確かに大切であるが、それ以上にチームメンバーはメンバーの一員として自覚をもって取り組むことが必要であるとこの学習を通して強く感じた。

また、活動内容において、自分の考察やチームメンバーの考察、他のチームの考察にと

でも興味深さを感じた。今回考えたような小学校での取り組みは、実際に20年後自分の勤める小学校で行われているかもしれないし、もし実現されるならと思うととても夢がある。この学習で得た考えをもてたことはとても貴重であり、これからの教師として旅立つ自分と、児童である子どもとの関係性について改めて考えさせられた。また、私たちのチームが構想したような学校・地域・家庭の連携密着はますます期待されるであろう。私は、これからもっと、具体的な実践例などを詳しく学び、そのあり方について考えたいと思う。

次期受講生へのアドバイスとしては、自分の我よりもどれだけチームのことを考えて自分の役割を果たせられるか、それがチーム学習のキーポイントであると思う。チームで活動するメリットはたくさんあると思うが、メリットを活かすためには一人でも学習の秩序を乱してはならないということをお初めによく考えてもらいたい。けれども、向上心をもって取り組みれば必ず良い成果が得られるので、諦めないでチームを盛り上げてほしい。

#### 参考文献・URL

- ( 1 ) 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 FY プロジェクト / 編著  
『「読解力」とは何か PISA 調査における「読解力」を核としたカリキュラムマネジメント』 2006年 三省堂出版
  
- ( 3 ) 文部科学省発行ホームページ  
『PISA (OECD 生徒の学習到達度調査) 2003年調査』  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/04120101.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/04120101.htm) (2006,11,24 アクセス)  
  
『OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) 《2000年調査国際結果の要約》』  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/001/index28.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/index28.htm) (2006,11,24 アクセス)
  
- ( 4 ) 田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵 著  
『新しい時代の教育課程』 2005年 有斐閣出版

#### 引用文献・URL

- ( 2 ) 横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 FY プロジェクト / 編著  
『「読解力」とは何か PISA 調査における「読解力」を核としたカリキュラムマネ



ジメント』 2006年 三省堂出版 引用箇所：下線部 P.9

( 5 ) 田中耕治・水原克敏・三石初雄・西岡加名恵 著

『新しい時代の教育課程』 2005年 有斐閣出版 引用箇所：下線部 P.  
209

### 構成

A4用紙 全17枚(表紙・アブストラクト・目次：3枚、本文：14枚)